

# 社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役社長 稲垣 良次

2016. 9  
No.277

“相互啓発型イナテック”にするには

“しかけ”が必要

下図は、安全文化の発展段階を表した「ブラドレーモデル」と呼ばれるものです。大変わかりやすく段階が示されています。イナテックが目指す姿はもちろん『相互啓発型企業』です。

この安全文化の図は品質保証でも全く同じです。先月お客様に大変ご迷惑をおかけした問題で、イナテックのレベルがよくわかりました。

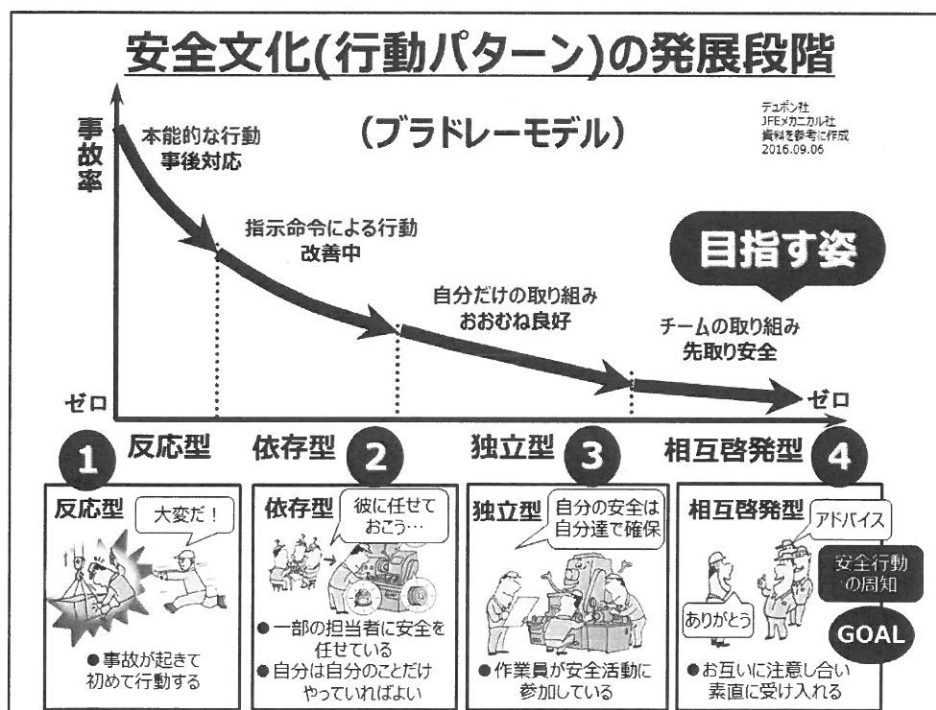
結論から言えば、イナテックは「指示命令による行動」までではできるようになってきていますが、まだ『依存型』企業なのだという事です。

ただ部門間の連絡ができていなかったり、言葉が足らなかつたりした結果、誰もアクションを起こしていないため、または個人の仕事になってしまったために重要かつ重大な問題になってしまったのです。

検査員(品質保証)の方は、もう少し自分の仕事の意義を考える、生産技術の方は製造の方々へ構造の説明をする、そのような各部門の役割を考え、『相互啓発型』にあるように「お互い注意し合い、素直に受け入れ」れば、必ずお客様に“100%良品をお届けできる”イナテックになります。

「ゼロ災継続」を可能にする6つのポイント

1. 仲間に対する働きかけ
  2. 仲間との相互注意
  3. 仲間への思いやり
  4. 積極的な情報の共有化
  5. 他人に対するケア
  6. 組織に対する誇り
- そして、
- ・正しいことをその場で伝達する
  - ・メールに頼らず、顔と顔を合わせ、コミュニケーションを取る



・上司の基準が部下の最高の基準である

・安全で品質がいい会社は、最高の利益を出す

イナテックは、“相互啓発型イナテック”に向かつて走り続けます。

「雑草は踏まれても諦めない」

静岡大学教授 稲垣 栄洋

人事総務課の高木淳次さんがこの講演会に出席してくれました。その時のレポートを紹介いたします。

・「雑草」は、「踏まれてもまた生えてくる」という強いイメージがあるが、実は自然界では「弱者」である。「弱者」ゆえに、生き残るための戦略をたてているのが「雑草」である。

・好環境下では雑草は他の植物には勝てない。場所を「ずらす」ことで生き残る。また、小さいカプトムシは大きいカプトムシにはかなわないが、エサをとる時間帯を「ずらす」ことで生き残る。

・ダーウィンは「強い者、賢い者が生き延びるわけではない。唯一生き残る者は“変化できる者”である」と言っている。

・「踏まれるスペシヤリスト」オオバコは、葉と茎がしなやかさと硬さを併せ持っている。また、オオバコの種は雨が降ると粘着物質を出し、それが靴やタイヤなどに付いて運ばれる。踏まれることによって繁殖している。

・冬の間放射状に葉を広げている雑草は、太い根に養分を蓄えて春に備えている。“強い”植物が花を咲かせる前に、蓄えた養分を使って花を咲かせ実を結ぶ。

・雑草には「変化する可塑性(変化する力)」がある。好環境下ではどんな植物でも長期にわたって種子生産ができるが、どんなに条件が悪い状況でも必ず花を咲かせ実を結ぶ力が雑草には備わっている。

・変化するために必要なことは「変わらないこと」と、「つまり、「花を咲かせて実を結ぶ」という目的は、その過程がどうであれ「変わらない(ブレない)」。

### 三九

蘆花被下、臥雪眠雲、保全得一窩夜氣。竹葉杯中、吟風弄月、躲離了萬丈紅塵。

一 蘆花被——あしの穂を綿代わりに入れた薄いふとん。「被」は、ふとん。夜具。ニ 一窩の夜氣——一室に安眠し回復した元氣。「窩」は、室。「夜氣」は孟子の告子上に見える語で、深夜、寂然として万象が寝静まったとき、昼間の邪念は去り、精神はおのずから清らかになり和平になる。孟子はこれを夜氣といい、夜氣を存し養うことを修養法の一としている。三 竹葉杯——酒の杯。「竹葉」は、酒の異名。孟浩然の詩に「漸く看る、春は芙蓉の枕に逼るを。頓に覚ゆ、寒は竹葉の杯に消ゆるを」(除夜有懷)とある。四 躲離——身をかまし、離れ去る。

せんべいぶとんにくるまって、雪の中、雲の上の山小屋に眠ると、室中に満ちた靈氣による元氣を、十分に回復し保つことができる。また、竹葉の酒杯を挙げて、清風に吟じ明月を眺めると、塵にまみれた俗世間を、すっかり抜け出ることができる。

講演の中で「逆境こそが順境」という言葉が印象に残りました。逆境においても自分の尺度で生き残る場所を決め、弱者であつても自分「らしさ」を強みにしていくことが成功への鍵であるのではないかと思いました。

高木さん、すばらしいレポートありがとうございます。ございました。イナテックも正に今、「自分の尺度で生きる場所を決め、逆境の波に乗り、逆境を乗り越える」のだと痛感いたしました。高木さん！ありがとうございます。